

# 混迷の時代生きる指針学ぶ

## 一関学発祥の地、神戸文学館を訪ねて



# KSC 留学生新聞

〈発行〉  
関西学院大学  
総合政策学部  
日本語V教室一同  
〒669-1330  
兵庫県三田市学園上ヶ原1番



赤れんが造りの神戸文学館

キャンパスによろやく友と語り合える日々が戻った。待望の対面授業が始まったが、留学生の母国ではコロナ禍が続き、まだ数々の不安がぬぐえない。ロシアのウクライナ侵攻も世界情勢に大きな影を落とす。そんな世界史の大転換点にもなりそうな混迷の時代を我々はどうか生きるべきか。関西学院大学総合政策学部日本語Vクラスのメンバーは「戦争の世紀」といわれた20世紀を生きた作家たちから、何か「生きる指針」を得ようと、関学発祥の地にある神戸文学館(神戸市灘区王子町)を訪ねた。神戸ゆかりの作家らの作品には、学ぶべき危機をかわすための知恵やメッセージがあった。

【林叡珍、李沛茁、李熙彬、金榮珉、馬帥広、馬銘沢、金東夏】

1889年(明治22年)神戸郊外原田村に米宣教師、ウォルター・ラッセル、ランバス氏が関西学院を創立。現在神戸文学館が入っている建物は1904年、関学のチャペルとして建てられた。93年に尖塔部分が完全復元され、2008年に文化庁の登録有形文化財に指定された。設計はヴォーリス設計事務所。

### 「羅生門」が表現したエゴイズム

神戸文学館を訪ね、芥川龍之介が神戸文学館とゆかりのあることを知った。配布されている資料の中に彼を中心とした他の文豪との人物関係図が何枚も置かれていたのを見たからだ。彼の名前からとった芥川賞は最も権威があるとされている。自分も日本への留学前から彼の作品「羅生門」が大好きだった一人で、改めてエゴイズムの内実をよく理解できた。

羅生門は、平安時代末期の京都を舞台にして、地震や火災そして飢饉などの災害で死人が棄てられた象徴的な場所である。そのような羅生門の中には仕事を解雇され途方に暮れる下人と死人の髪を抜いてかつらを作っている老婆が登場して、自身の利益ばかりを考へる人たちがいた。下人と老婆のエゴイズムが対立する場面がある。下人は、死人の髪を抜いて

てかつらを作る老婆を知り憎悪を抱くが、「死人の髪を抜く」ということは、何ぼう悪い事かも知れぬ。だが、ここにいる死人どもは、皆、その位な事を、されてもいい人間ばかりだぞよ」という老婆の言葉を聞いた下人は「己もそうしなければ、餓死する体なのだ」といい、老婆の着物を剥ぎとって行方不明になった。

### 「六ペンスより月」という自由を得た



神戸文学館を訪れ、神戸に住んでいたことがある英国の作家、サマセット・モームの足跡をたどりながら将来について悩んでいた過去の自分の姿を振り返ることができた。関学に入学生する前、自分は韓国・大邱出身の平凡な工科大学の学生だった。工大が就職に有利だという担任の先生の言葉にあまり悩むこともなく、機械工学科に入学したが、自分の適性に合わず勉強についていけない。進路について長い間悩んでいたある日、通学バスでサマセット・モームの「月と六ペンス」という本を読んだ。作家のゴーギャンをモチーフにした小説で、主人公は安定した職場と妻を捨ててパリに絵の勉強をしようとして出かけた。その後夢に見ていた画家になってタヒチ島で最後の傑作を完成させ、死を迎えるという内容だった。ゴーギャンは自分よりほかに持っているものが多く、安定し、結婚して家族までいた。しかし、自分の夢のために全てを捨てるのに少しも迷いがなかった。小説でゴーギャンは言う。「貴方が私に何を言おうと、どう思っているよう

### 新たな視点ももたらした「阿片戦争」

新型コロナウイルスの感染拡大が収まらず、中国・瀋陽からすぐに日本に入国できない状態が続いた。神戸文学館の取材にも同行できず焦燥感が募ったが、母国が大国に蹂躪されようとした大きな歴史の転換点を描いた陳舜臣さんの「阿片戦争」を中国語訳で読むことができた。これまで知ら

なかった経緯が描かれ、多様な視点を与えてくれた新たな歴史認識を持つことができた。これまで阿片戦争については一応の知識はあったが、細かい部分については知らなかった。陳舜臣さんの作品は当時の国際情勢から解き明かし、清朝と英国双方の国内政治の状況から貿易による権益拡大、海賊の暗躍など多様な視点で、読み手をゆるやかに戦争の時代へと引き込んでくれた。特に印象深かったのは、

英国の外相が清朝の門戸を開く政策を実施しようとする場面だった。「大英帝国の栄誉のために」という信念の下に「広州以外の各港を開くには、英国の武力を運用しなければならぬ。血で得た権益は磐石のように堅固になり、米国は及ばないだろう。その時、帝国の栄誉は大いに異彩を放つだろう」と強い意志を明らかにした描写に衝撃を受けた。武力で貿易を迫るやり方が英国に栄誉をもたらすのかと問い返したくなった。植民地の権益を拡大し、略奪した物資の数で英国を豊かにすることが栄誉と言う

のなら、それは大いに成功したに違いないが、それはアヘンを吸って不健全な心身の人々を増やし、武力衝突によって死んだ罪なき人々の犠牲に基づくものである。小説の後半で英国の国会が清朝に軍隊を出すための予算案について議決するシーンがあった。その結果わずかに9票の差で予算案が通った。「英国の国旗はついに汚された。今後国旗を見ても血が騒ぐことはないだろう」「イギリスの新しい領土香港と舟山に乾杯。世論は真二つにわかれていた。自分が学んだ歴史のテキストにはこの「9票差」は書かれておらず、英国にはずっと悪党のイメージを持っていて、すべての英国人を悪党のように思わせたのは、自分がアヘンの危害や戦争の結末だけを見て、自分で十分調べないままナショナリズムを高揚させたためであろう。

当時の清朝政府では官僚の腐敗、貧富の差の拡大、鎖国政策の維持、アヘンの軍隊での流行など背景があって、清朝の軍事力の脆弱性が顕在化していた。英国の侵攻が無くて、清朝は衰退すると想像できた。小説の中でアヘン厳禁論を主張する林則徐が軍事力を強化する準備をしていたことが分かった。改めて軍事力は他国に侵略を受けないために必要と言った。読後に歴史を一面の価値観から見ず、多様な視点で振り返る重要性を学んだ思いになった。フェイクニュースが多く流される現代は情報の真偽を見極めて、自分が確かな判断をするため、常に多様な視点を持ち続けることが重要だ。

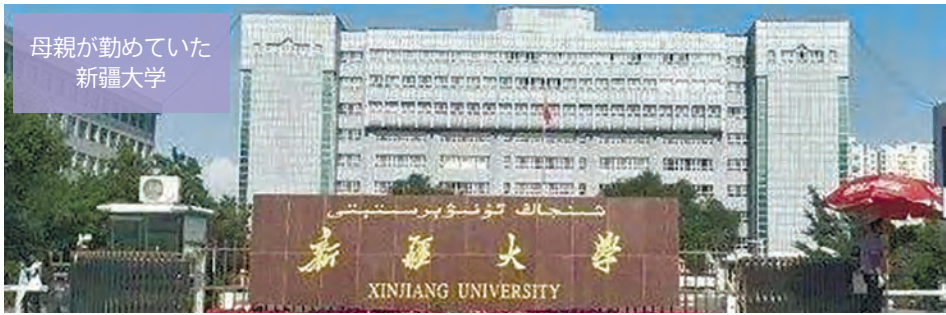
関学発祥の地を示す石碑を見る日本語Vのメンバー



【馬帥広】

### 母親が教えてくれた勇気

母親が勤めていた  
新疆大学



どんな困難な時を迎えても、勇気を持ち続けて乗り越える。中国で自分の留学生生活を支えてくれている母から、そんな強い気持ちを持ち続けることの大切さを教わった。

2009年、中国・新疆ウイグル自治区の新疆大学に教授として単身赴任していた母親は、民族差別に抗議する一部の学生による大学突入事件に遭遇した。夜9時ごろ、大学で資料整理をしていた母は構内で爆発音を聞き、ウイグル族の同僚から「外は大混乱です。早く隠れて、あなたが漢人と分かれば殺されますよ」と電話がかかってきたという。外の道路には血まみれの人が横たわり、「漢人を殺す」という叫び声を何度も耳にし、遠く離れていた父親と自分に連絡をとろうとしたが、武装警察が電話やインターネットを封鎖し、通じなかった。

翌朝、母は外を1000人のデモ隊に囲まれた大学構内で、警官と教員250人と一緒に立てこもった。石などが投げ込まれ、母も擦り傷を負ったが、一步も引かなかった。4日後、武装警官が増員され、騒動が収まったが、死傷者も多く、まさに「地獄」の様相だったという。母は後に「大学から逃げても新疆から逃げることは不可能だった。もし死んだとしても、それは、学生の

安全や平和のための犠牲だったので怖くはなかった。でも、あなたのことは心配だった」と語ってくれた。

事件後、電話が通じて母と話せたときは、大声で泣いてしまい、母の友人は大変驚いたという。たとえ怖くても正しいことを貫くには、勇気をもって対処することが重要だ。母は身をもってそれを教えてくれたのである。

自分が成人する前、父が亡くなった。その時の治療費のため文無しになった母は、自分の留学生生活を支え続けてくれている。日々感謝しながら、自分を鍛錬している。いつか母の思いに応え、平和になった社会で大人としての責任を果たしたい。

【馬銘沢】



ふるさとの淄博市・臨淄区は「蹴鞠発源地」

### 「学びに年齢は関係無い」と教えたJ先生

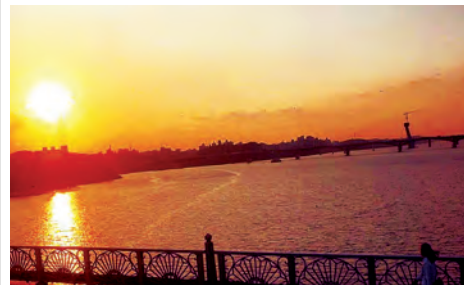
生涯学習が注目される今、「学びに年齢は関係ない」という言葉に共感する人が多いのではないかと。この言葉を教えてくれた韓国・ソウル新村にあった日本語学校のJ先生を紹介したい。

今から約4年前、私は韓国の美術大学を休学し、日本留学の準備をしていた。当時は高校時代に打ち込んでいた美術制作をあきらめる心残りや、家庭の経済事情が苦しいという悩みを抱えていた。繁華街で制服を着て通学する高校生やおしゃれな姿の大学生たちを見ながら、気持ちが落ち込み、自分だけが取り残されるような惨めな気分になった。

J先生は厳しいながらも優しく励ましてくれたり、自分の日本留学当時の経験を打ち明けてくれたりしながら、「学びに年齢は関係ない」と繰り返し激励してくれた。

先生は自分の研究をするために韓国で最も有名な会社を辞めて、日本の大学院に留学、日本に家族を呼び寄せて生活した。終わりの見えない博士の課程。その間、阪神・淡路大震災を経験し、大学院とアルバイトを両立させながら生活の基盤を築いたという。

先生の経験は大きな刺激を与えてくれ



日本語学校の通学で見た漢江の夕景



日本語学校でもらった合格証明書

た。韓国で一番有名な日本語教師として知られている先生は自分と同じ悩みを抱え、それを乗り越えたのだった。日本留学をあきらめたいと思ったことが何度もあったが、自分も見習いたいと思った。

3年生になる前に就職か大学院進学か迷っていた私は、就職を選んだ。J先生のように意志さえあれば大学院はいつでも行けると心残りはなかった。もし大学院に行きたくなくても、先生のように会社を辞めるか、辞めずに両立させるという選択肢もあるはずだ。

年齢にとらわれず、自分の信じる道を歩みたい。J先生が希望を教えてくれたように、自分も誰かの希望になれるように頑張りたい。

【李熙彬】

人々

### 入学式で勇気を出し得た友

韓国・仁川出身の自分は4年前の関西学院大学の入学式で、隣の席にいた宮本徹也君に声をかけた。そこから親しくなり、何でも言い合える仲になって宮本君に教えてもらったことも多く、「生涯の友」と思えず、ずっと付き合っている。

これまで日本語を丸暗記しかしておらず、入学式では自信がなく戸惑ったことが多かった。たまたま隣の席に座っていた彼に、思い切って「あの、すみません」と声をかけた。初めて使った自分の勇気のある日本語であった。それがきっかけで、理解できないことはすべて教えてもらえるようになり、基礎演習のゼミ、他の授業などでも一緒に学んだ。

知り合ってから1カ月後、一緒に食事をしている時、「基礎ゼミの先生が早口で言っていることが分からず、課題も多すぎではないか」と宮本君に問いかけ、授業で



の不満を口にした。すると、宮本君は「確かに、そうかもしれないけど、先生の立場で少しだけ考えようよ。何でもそこまで俺たちをきちんと教えようとするのかを考えてみたらどうか。あまり、悪口は良くないと思うよ」という言葉が返ってきた。

自分は宮本君が同意してくれるものと思っていたので、意外だった。確かに悪口を言う前に、少し冷静に考えることが必要だと思った。就職した宮本君と今も連絡を取り合っている。以前のように会う機会は減ったが、自分と本気で向き合ってくれる友達である。

【金東夏】

### 愛情表現が下手な兄弟

昨年の中国・青島での正月、自分は伯父の一周忌で父が泣く姿を初めて見た。父は軍隊にいたことがあり、普段は感情を出さない厳しい人だったが、伯父のことを思い出すとやはり我慢ができなかったようで、親戚の人が皆帰った後もずっと悲しい顔で墓石の前に立ち続けていた。

伯父と父の日常を振り返ると、けんかばかりで、実際は仲良くなかったように見えた。生前の伯父は厳しい人で、祖父の教育もあったのか、それとも生まれつきの性格なのか、父の事を叱ったり、殴ったり、強く当たることがよくあった。だから父にとって伯父は自分を理解する人ではなく口やかましい人だった。父は伯父が好きではなかったようで「あの人のことはもううんざりだ、一生会いたくない」とよく口にした。小さい頃から、伯父が結婚して実家を出た後もずっとそうだった。

しかし、伯父はとても優しい人で、愛情表現の仕方が下手なだけだった。自分が日本で詐欺に遭った時もそうだ。お金を取

られ、落ち込んでいたとき、伯父が電話をかけてきて、大声で叱った。「お前はバカか」「なんで成長ができない」。アプリ電話が使いこなせない伯父は自分を気遣ってわざわざ国際電話でかけてきてくれた。言葉の裏から愛情を感じた。

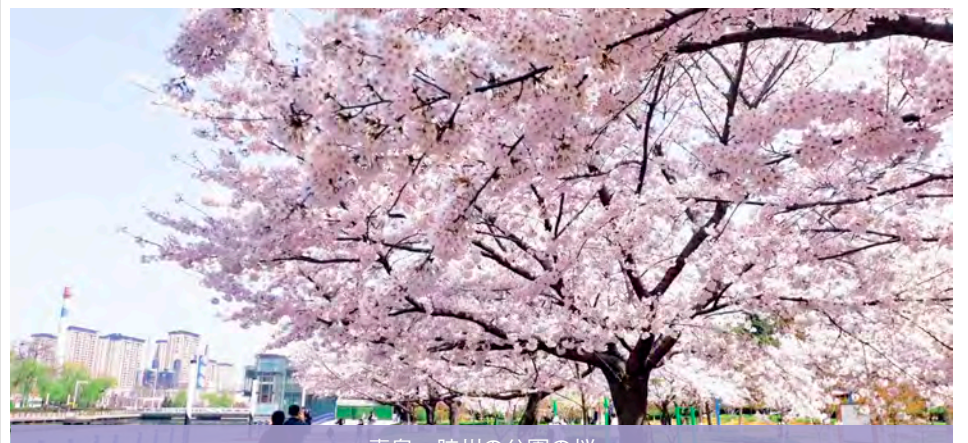
父も「一生会いたくない」と言いながら、昔から週一回のペースで伯父と飲みに行っていたし、伯父が困っていたら必ず助けに出向いた。伯父の悪口を言いながら、なぜ毎週会おうのかがわからなかった。父にとって伯父は大切な肉親だったということが最近になって理解できた。

本当に大切な人は失ってから初めて気づくものだ。伯父が亡くなって、年上の従兄弟と口げんかしている私に父は「二人仲良くしろ」と寂しそうに言い、「私にはもうけんかできる兄はいなくなった」と小声でつぶやいた。大切な人はずっと傍にいるから、気づきにくいのかもかもしれない。

【李沛茁】



宮本君(左)とともに



青島・膠州の公園の桜

## いつも支えてくれるミンさん



日本語学校で親しくしていたミンさん(右)

韓国・栄州市の高校を卒業後、日本に留学し、ひらがなさえ知らなかった自分に対し、大阪・梅田にある同じ日本語学校に通う10歳以上年上のミン・ギョンウンさんはずっと親しくしてくれ、さまざまなことを教えてくれた。今は韓国に帰って仕事をしているミンさんはずっと心の支えでもある。

ミンさんと初めて出会ったのは5年前の日本語学校の入学式だった。隣に座り、お互いに名乗り合ったが、別のクラスになり、お互いのことを知らないままだった。6カ月後のテストでまたクラスが変わり、今度は同じクラスになった。それまで他の国の人に囲まれて、日本語も韓国語も通じず、寂しい日々を送っていた。日本に来たことを後悔し、韓国に戻りたいとさえ思っていたことをミンさんに母国語で伝えることができて、大きな慰めになった。

ミンさんは自分と1、2歳差ぐらいにしが見えない童顔だった。英語と中国語も使

いこなし、一人で旅行する自由な人だった。明るく優しいミンさんは皆から愛される存在で、近くにいると、自分も多言語を話せるようになりたくなり、さまざまなところに行ってみたくになった。ミンさんと同じ仕事も始めて、中国語の勉強もするようになった。

ミンさんは、日本語に自信がなく進学で迷った時、大きな力になってくれた。「世界は広く、大学ではさまざまな経験ができる」「あなたは賢い子だから、きっと大学に入れる」と励ましてくれた。留学試験で緊張しすぎてどうすればいいかわからなかった時にも、面接の練習に付き合ってくれた。受験が終わるとすぐ会いに来てくれ、ご飯をおごってくれた。

ミンさんは今韓国におり、連絡を取っている。ミンさんの応援がなければ、現在の自分はいない。心強い友人であり、優しい姉でもある。そして、学ぶことが多い先生だ。【林叡珍】



大阪・梅田にある日本語学校の前に咲いた桜

## 忘れ難き

## 信じてくれた両親の言葉

韓国・大邱出身の自分はあるある両親の愛と信頼を受けながら育った。中学時代、クラスメートとささいなことではんかをして相手の歯を折ってしまった。学校は大騒ぎになり、働いていた母は学校に来て、担任の先生とクラスメートの両親に謝罪した。母の姿を見ると、とても胸が痛み、申し訳なざで一杯になった。それでも家に帰る途中、母は少しも叱らず、病院の治療費をいくら払ったのかも一切言わなかった。それどころか、「殴られるよりはマシだ」と言い、落ち込んでいた自分を励ましてくれた。その一日中、学校で罪人に対するような目で見られていたので、母の一言は大きな慰めになり、強く母の愛を感じた。

その後高校に進学したが、勉強に集中できず、サッカーに夢中になった。1年生が終わる頃、ずっと黙っていた父が休みの

日、「父さんはお前を信じる。お前が何をしてもうまくやりこなし、最後まで正しい道に進むと思っている」と言った。うれしくて、何も言えなかった。遊んでばかりいる息子をこんなに信じてくれる父の愛を強く感じた。その後、ようやく勉強に集中して無事に大学に進学した。

入学した学科が適性に合わず、学校を辞めて留学すると言った時も、父は何も言わずにまた「最後まで最善を尽くせ。お前を信じる」と励ましてくれた。そのお陰で再び大学生になり関学で好きな勉強をしている。

両親の恩は一生をかけても返せないほど大きい。コロナで両親に会えないまま3年になり、両親は一日一日老いが近付いている。一日も早く成功して報いたい。【金栄珉】



韓国・大邱市での家族写真

## 窮地を救ってくれた幼なじみ

中国・瀋陽の幼なじみのA君は、自分が家庭の事情で学業を放棄する寸前までオンラインゲームに夢中になった時、的確なアドバイスをくれた。彼の言葉がなかったら、留学をやめて、母国に帰っていたかもしれない。A君は窮地を救ってくれた恩人だ。

A君は小学校に入る前から幼なじみで、親戚でもあった。自分は日本に留学し、彼は中国の大学に進学した

が、ずっと連絡をとりあってきた。自分は3年前に、家庭の経済的事情で学業を断念し、親戚の会社で働くことを考えざるをえない時期があった。気持ちが落ち込み、現実逃避のためにゲームに夢中になってしまい、よく徹夜することもあった。一時は前向きに考え、やめようとしたときもあったが、なかなかできなかった。

そんな時、A君が自分の異常に気づいてくれ、「なぜ誘わない。結構遅くまで一人でやっているのか」と声をかけてくれた。「別に……。一人でやりたかっただけだ」と素っ気なく答えてしまった。今から思うと、傷つけるような言葉だったが、当時の自分はそんな気配りができなかった。それでも彼は文句も言わず「一緒にやろうぜ」と気遣ってくれた。

それから何日間も徹夜のゲームが続き、夜12時が過ぎると彼は「今日はここまでにして休もう」とラインオフにした。彼の



瀋陽のPCR検査所

言うことも聞かず、またしばらく遊び続けた。そして、ついに事情を打ち明けた。

すると、彼から「今学業を放棄することは解決につながらない。やっとなら外国へ行って2年も勉強してきたのに、帰国するのはもったいない。本音はどうなんだ」と聞き返された。もし本音でないなら、両親もそう望んでないだろうと言ってくれた。その言葉で、現実逃避のためゲームに夢中になってしまったことに気づかされた。彼は「両親が家庭の事情を教えたのは、危機感を与えて、逆に奮起してほしかったからではないか」と励ましてくれた。

学業を断念する寸前の衝撃的な言葉で、思い直すことができた。自分が落ち込んでいたことに気づき、ずっと一緒に考えてくれたA君を思うと、心が温かくなり、ありがたい気持ちでいっぱいになる。

【馬帥広】

### 今の関係を長く維持せよ

自分が紹介したい小説は、神戸文学館の書棚にもあった村上春樹さんの「女のいない男たち」である。2014年に書かれた作品であり、主に男性たちが女性との事情で別れる人間関係を描いている。

自分の目を引いたのは、この作品が映画化されたからだ。人間関係の描写が印象的に思え、読んでみたくなった。内容を少しだけまとめてみると、サラリーマンである男性主人公Kさんは付き合っている彼女のMさんが合っている彼女のMさんがいる。しかし、Kさんはほかの人々と違って少し変な性癖を持っている。そこでMさんに「俺は、今の君に愛情を感じられない、だから、俺の愛情を高めるためにも、俺の職場の後輩の男と付き合ってくれないか」と持ちかけた。Mさんは後輩と付き合い始めると、K



神戸文学館にある文学作品の関連映画などの資料

### 信じていることをやり遂げる

関学発祥の地でもある神戸文学館に見学に行き、神戸出身の映画監督、黒沢清さんの作品「スパイの妻」が賞を得た記事を読んだ。作品を観賞した後、自分が信じている正しいことをやり遂げる勇気を持つことの大切さを学んだ。言論の自由があるとはいえ、政府が隠したい過去の戦争での日本の悪行を告発する作品を見て大いに驚かされた。

戸が舞台だ。主人公である優作は満洲で政府が化学兵器を作るため、ウイルスによる人体実験をしているという恐ろしいことを偶然知り、正義のために国家機密を世界に公開しようとしていた。妻の総子は国に反抗した夫を信じ、スパイの妻と罵られながらも、夫と一緒に行動しながら覚醒する物語である。

この作品は、2年前のヴェネツィア国際映画祭で公開され、日本で17年ぶりにコンペティション部門銀獅子賞を受賞した。1940年の戦争当時の神

国を裏切るのと等しい行為だ。総子は仕事と家庭を失ってもよいのかと優作を激しく責めた。確かに正しいことをやり遂げるには時に自分の命や大切なものをかけなければならない。優作はそれでも自分が信じた正義のために動いた。その優作の勇気に自分は心動かされた。

自分の父は軍にいたことがあり、小さい頃「もし国から罪のない人間を殺す命令が出されたらどうする」と父に聞いたことがある。父が「残酷な話だが、国がそういう命令を下した以上拒絶することはできない」と言った。軍はそんなふうにしていて父に言われ、それは戦争をなくす道につながらず。

【李沛茜】

### ゲームを通じて接した文豪たち

神戸文学館で興味深かったのは「文豪とアルケミスト」というゲームが5周年記念で神戸文学館とコラボレーションした企画だった。実際に文学館に行くことなく「文豪とアルケミスト」に出現する文豪たちの説明や文学書を読むことができ

このゲームは文学書が全部真っ黒になることから、文学書を守るために文豪が転生するシミュレーションゲームだ。ゲームを始める前の名前の設定からスタートする。我々は特殊能力者であるアルケミストになり、帝國図書館の任務司書として派遣されるとい設定である。実際に本を破壊する侵略者たちに対抗するため、文豪を転生させ、異常現象が発生した文学書を浄化させる。

このゲームは文学書が全部真っ黒になることから、文学書を守るために文豪が転生するシミュレーションゲームだ。ゲームを始める前の名前の設定からスタートする。我々は特殊能力者であるアルケミストになり、帝國図書館の任務司書として派遣されるとい設定である。実際に本を破壊する侵略者たちに対抗するため、文豪を転生させ、異常現象が発生した文学書を浄化させる。

このゲームの中で一番魅力を感じたキャラクターは織田作之助だ。ゲームをスタートして初めて自ら選



「文豪とアルケミスト」が神戸文学館とコラボレーション

### 多様な価値観を教えてくれた「大地の子」

【林敬珍】

館を取材したのを機に、中学時代に国語の授業で見たテレビ映像による「大地の子」を思い出し、本を読み返すことにした。当時は中日関係が最悪で、自分が住んでいた山東省淄博市の町でも反日デモが頻りに発生していた。

作品で最も印象的な場面は戦争による残留孤児だった主人公の陸一心が同僚と出張し、富士山に行った時、その同僚が「万里の長城の方が富士山より存在感が大きい」と言い、陸一心は自分には日本人の血が流れているのに、同僚の言葉にうなずいた。自分が中国人でもあることを自覚させられ、心に混乱が生じた様子が描かれ、心ひかれた。

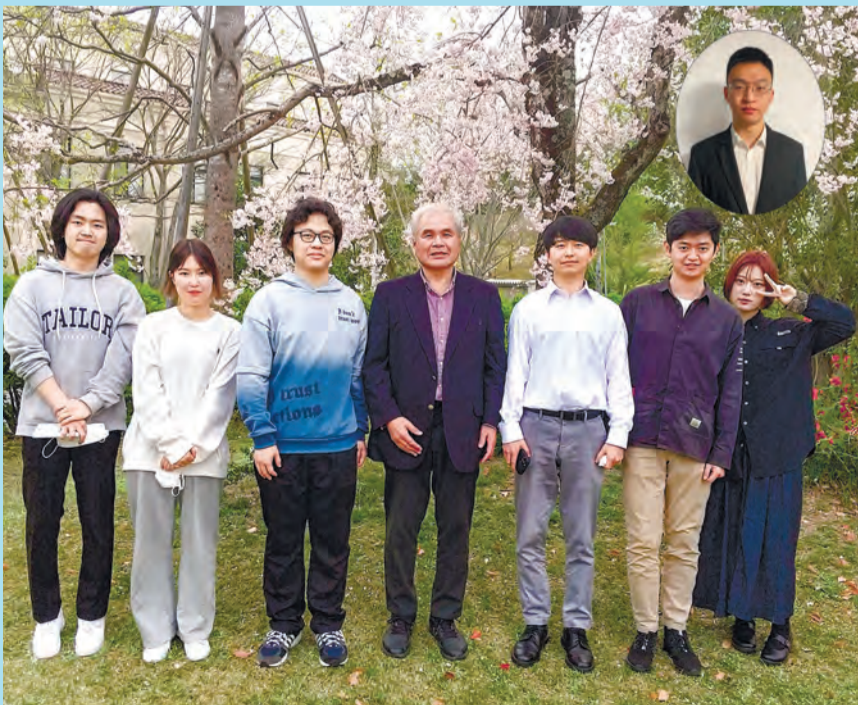
### 編集後記

日本語Vクラスも3年ぶりに対面授業がなかった。当初一部の留学生はまだ来日できなかったが、受講学生に日本の近代史ゆかりの土地を知ってもらおうと、神戸市灘区王子町の関西学院発祥の地を一

明治期から昭和初期までの40年間、関学キャンパスが置かれ、欧米の進取の精神を学ぶ舞台であった。ちょうどロシアによるウクライナ侵攻の時期と重なり、展示されている約100人へのほる神戸ゆかりの作家たちが描いた戦争など過去の歴史に学ぶことも多かった。自分も陳列棚のうち、高校時代に読んだ井上靖の「風濤」に目が向き、再読することにした。大国・元に蹂躪された小国の高麗王朝の悲哀がひしひしと胸に迫った記憶があり、現在のロシアに蹂躪されるウクライナの苦難が重なった。感情を抑制し、高麗の太子の行動を淡々と表現した井上靖の文章はかえって元の暴虐ぶりを浮き彫りにしている。古今東西、覇権国家のたどる道は同じという思いが改めて募ってくる。

留学生たちは何を知見として得たのかを紙面に綴ってくれた。この取材を通して、現代史の大きな転換点を迎えたこの時期の学びの重要性を、各自が強く自覚できたのではないだろうか。

【担当講師・平野幸夫】



争への反省を綴った作品も多かった。中国人にも戦争に反対する人は多い。どの国でも他国と良好な関係を築き、平和を保ちたいはずだ。ひと握りの人たちの言動が、その国の全体的な印象を変えることがある。それに左右されないように、各自が多様な価値観を持たなければならない。『大地の子』は何事にも一つの考え方にとらわれて見えてはいけないということを教えてくれた。自分ももっと心の鍛錬を重ねて、実のある人生にしたい。

【馬銘沢】